

知求会ニュース

2005年04月

第13号

◎ 2004年度国際学研究科修了おめでとうございます！

2005年3月24日木曜日午後4時00分からC棟1121教室の共通大講義室にて、学部生の後に引き続き2004年度学位記手渡し式が開催されました。

今年度の修了生は、国際社会研究専攻 高橋昭博さん・朴海銀さん・阿部智英さん・齋藤智美さん・仁欽さん・弭麗峰さん・柚木慶生さん・俞培蓉さん 8名と国際文化研究専攻 金紅梅さん・李善英さん・鳥日哲さん・大島友樹さん・TRAN THI BICH HANH さん・張潤[女主]さん・白麗芬さん・朴得煥さん・水沼徹明さん・溝上望さんの10名で、計18名でした。今年度の修了生の主な進路は、進学3名、留学1名、高校教員1名、商社1名、製造業1名などです。記念撮影の写真は、みなくるねっと(<http://www.minakueu.net>)のアルバムで見られます。

◎ 進学おめでとうございます！

張潤[女主](チャン・ユンジュ)(国際文化研究専攻・5期生)さんが、東北大学大学院 環境科学研究科 博士課程後期 国際環境・地域環境学講座 朝鮮民族文化研究専攻に進学されました。これまでの博士課程進学者(法科大学院は除く)累計は、13名になりました。進学者の今後の研究成果が期待されます。

◎ 教職員人事異動

藤田和子教授

国際社会交流研究講座所属の藤田先生が3月31日付で定年退職されました。先生は国際学部に10年在籍されました。大学院では1期生からお世話になり、本年2月8日(火)には最終講義が行われました。大変盛況な講演会でした。次号の研究室訪問05コーナーで、先生の最終講義「東アジア共同体の実現を希求して」について掲載します。(関連記事が「学園だより」No.71-2005年1月の14頁に掲載されています。)

大学院同窓会の名誉会長として、知求会ではさまざまな形でご指導いただきました。本当に、いろいろありがとうございました。先生の今後のご活躍とご健康を祈念し、また知求会交流会などで再会できることを楽しみにしています。

高橋敏男事務長

農学部事務長の高橋さんが3月31日付で定年退職されました。高橋さんは、農学部事務長の前任は国際学部事務長として、今日の国際学部の礎を事務方として支えられました。永い間、お疲れ様でした。(関連記事が「学園だより」No.71-2005年1月の17頁に掲載されています。)

稲見正子専門職員

国際学部事務部所属の稲見さんが3月31日付で、在職42年をもって定年退職されました。国際学研究科と国際学部に関わった2年間という短い間でしたが、裏方として温かく同窓生を励ましてこられました。大変お世話になりました。後任には、総務部人事課人事係長から専門職員の吉川稔さんが4月1日付で着任されました。

古口茂男総務係長

国際学部総務係長の古口さんが4月1日付で、農学部総務係長に転任されました。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。後任には、総務部総務課専門職員から国際学部総務係長に青木芳哲さんが着任されました。

◎ 北島滋先生が新国際学研究科長に就任

藤田和子先生の定年退職により、後任に4月1日付で、前副学長の北島滋先生が就任されました。(就任あいさつが宇都宮大学大学院国際学研究科のHPで見られます。)

◎ 石澤良昭先生が上智大学学長に就任

非常勤講師の石澤良昭先生が、4月1日付で、上智大学第13代学長に就任されました。先生のこれまでの業績をもって、理事会で承認されたものと思います。今年度の集中講義の開催が懸念されますが、先生の益々のご健勝とご活躍を祈念いたします。(詳細は、上智大学通信第306号参照 http://www.sophia.ac.jp/J/press.nsf/Content/306_01)

◎ 藤田先生退官記念パーティー開催報告

去る2月26日(土)に、国際学研究科長および国際学部長であった藤田和子先生の退官記念パーティーが宇都宮駅東「日本海庄や」において、藤田研究室の実行委員会主催によって行われました。今後退官される予定の各研究室院生に向け、また大学院同窓会として組織体制を強化する意味も込めて、実行委員会に原稿をお願いしました。

兼ねてより、大学院同窓会ならびに学部同窓会でも名簿管理が懸案事項になっています。名簿を充実した内容に、また生きた情報にするためにも、今後は各研究室と同窓会が密接な連携をするべき時期に来ました。ひとりひとりが、同窓会の構成員であることを自覚することにより、歴史の浅い同窓会でも、強力なネットワークを創ることは可能であると確信しています。会員の皆様のご理解とご協力をお願い致します。

追記、3月24日午前11時半に宇都宮市国際交流協会の橘晴征事務局長へ、実行委員会の岡本義輝さんと藤田研究室・学部OGの毛塚有美さんからパーティーの残金が、スリランカ南部被災地の子ども達のために募金されました。知求会のモットーである「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」を实践する小さなことですが、やがて大きなうねりになることを感じます。今後の藤田研究室OB諸子・OG諸姉の益々のご健勝とご活躍を祈念します。

研究室最後の一大イベントの足跡

藤田先生退官記念パーティー実行委員会

今年 3 月末日をもって藤田和子先生が定年退官されるに合わせ、退官記念パーティー実行委員会が昨年 10 月に発足した。以降、今年 2 月のパーティー当日まで我々が苦勞した名簿作成を中心に、少々紙幅を頂きたい。

記念パーティーをやるべいと腰を上げたまでは良かったが、研究室の諸先輩方の動態調査及び名簿作成が最優先で、かつ最大の難問となった。2002 年度以降の 3 期分に関しては、ゼミ生名簿が現存しているので容易に動態を把握することができたが、困難を極めたのは 2002 年度以前の、すなわちゼミ生名簿が無い時代の名簿作成であった。まず研究室に保存してある各年代の学部卒業論文集から名前を探し出し、名簿のベースとなる一覧にした。しかし電話番号、現住所を調べるには限界があり、学部同窓会名簿、先輩方の縦横の繋がりを駆使し、そして実行委員会のメンバーが各先輩に地道ながら電話攻勢をかけ、名簿を少しずつではあったが埋めていくことができた。しかし、個人情報を巡る最近の情勢もあり、実家へ電話しても本人への取り次ぎすら断られたり、最後の最後まで電話番号 1 つ教えていただくことができなかつたりしたこともあった。まさしく暗中摸索ではあったが、最終的には第 1 期の先輩方から現在まで全ゼミ生の名簿が完成した。

名簿作成以外では退官記念誌編集、先生へ贈呈する記念品選定、会場選定、会費徴収などであった。特に記念誌編集は、各年度で代表 1 名が「贈る言葉」を執筆し、また伊藤学科長にも原稿執筆を依頼した。結果、手作りながら充実した記念誌が完成したと自負している。

パーティー当日、藤田先生が喜ばれたことはもちろんであるが、それ以上に第 1 期の先輩から在学生まで幅広い年代の「藤田ゼミ生」が一堂に会し、交流できたことが一番の収穫であったように思う。今後も苦勞して作成した名簿を元に、年 1 回くらいは藤田先生を囲んで宴を開けたらなあと希望している。

(第 4 期生・平井雅世、第 5 期生・佐々木哲夫、第 6 期生・岡本義輝)

◎ 厚生労働大臣教育訓練給付金講座認定

新年度より、国際社会研究専攻に続き、[国際交流研究専攻](#)も厚生労働大臣教育訓練給付金講座に認定されました。

◎ 地域研究コンソーシアム(JCAS)加盟

国際学研究科は国内の研究機関との交流を深めることができる 2004 年 4 月発足の[地域研究コンソーシアム\(JCAS\)](#)に加盟しました。

◎ 平成 17 年度大学院 2 月入試合格発表

国際社会研究専攻は、一般選抜 3 名・社会人 1 名・外国人 1 名の計 5 名です。国際文化研究専攻は、一般 1 名・社会人 2 名・外国人 1 名の計 4 名です。新専攻の国際交流研究専攻は、一般 3 名・社会人 2 名・外国 4 名・国際交流・国際貢献活動経験者特別選抜 2 名の 11 名です。総計 20 名でした。9 月入試結果とあわせて、累計 42 名です。

◎ 第 4 回目各学部等同窓会と宇都宮大学との打合せ会について

日時：平成 17 年 2 月 5 日（土）午後 1 時 30 分から

場所：宇都宮大学 第 2 会議室（本部 3 階）

議題：「各学部等同窓会の連合体組織について」と「課外活動共用施設建設事業資金への協力のお願ひ」について

「各学部等同窓会の連合体組織について」は、4 月 1 日より「[宇都宮大学同窓会連絡協議会](#)」として大学と各同窓会の意思疎通を図るために発足しました。また、「課外活動共用施設建設事業資金への協力のお願ひ」については、3 月末日に大学院同窓会名または国際学部同窓会名で、大学側の経費負担で郵送されました。発送にあたり、国際学部出身者の 62 名の方には吉葉国際学部同窓会会長との連名であいさつ状を同封しました。ただし、海外居住の場合は未発送です。現在、大学院同窓会の宛名ラベルの作成システムがまだ、不十分なために今回は国際学部の宛名ラベルに困りました。なお、国際学部の名簿宛先は実家の連絡先となっているために、会員の皆様にはご迷惑をお掛けしましたこととお詫びいたします。併せて、大学との連携に向けた意思表示のために、昨今の厳しい経済事情ですが、会員の皆様の寄付金のご協力をお願い致します。

◎ 国際学部だより

[横田匡紀講師 \(YOKOTA Masatoshi\)](#)

- ① 専門：持続可能な発展のグローバル・ガバナンス
- ② 前職：駒澤大学法学部非常勤講師
- ③ 趣味：映画鑑賞、水泳

自己紹介：同窓会の皆様、はじめまして。昨年 9 月より、高橋若菜先生の代替教員として着任しています。学部では「環境と国際協力」、共通教育では「環境と国際社会」を担当しています。研究の関心は、グローバル化が進行するとともに、環境問題が複雑化し、国際社会が構造変動する中で、持続可能な発展を実現するためのグローバル・ガバナンスはどうあるべきか？、世界環境機構を新たに作るべきか？、NGO などの非国家アクターの参加はどうあるべきか？などにあります。代替教員のため短期間しかいませんが、充実した教育をするように努めていきたいと思ひます。

◎ 国際オンライン・カンファレンス開催

台湾師範大学教育学部と宇都宮大学国際学部間において、3月17日(木)午後2時30分から4時まで、宇都宮大学附属図書館3階・国際会議室において、「台湾と日本における英語指導」のテーマで、英語によるオンライン会議通信方式で開催されました。参加者は、国際学部から藤田和子教授、柏瀬省五教授、高際澄雄教授、アンドリュー・レイマン助教授、高安真理子さん、佐々木一隆教授、台湾師範大学からヴィンセント・チャン教授、チーチェン・リン博士、ドリス・チェン教授でした。

◎ 掲載記事紹介

1. 『学園だより』No.71(2005.01)の29頁から31頁にわたり、留学センター所属の吉田和彦先生の「交流協定締結校モンゴル国立人文大学訪問記」が掲載されています。また、12号で紹介した講演会の記事が32頁に松尾昌樹先生により掲載されています。なお、18頁に松尾先生の新任教員自己紹介記事が掲載されています。
2. 月刊誌『クロスロード』2月号の26頁から29頁にわたり、友松篤信教授と国際交流研究専攻の阿部明代さん、小林一男さん、矢島亮一さん、そして国際社会研究専攻の高橋昭博さんによる座談会・国際協力の学び方を考える「大学の中で何を探し大学の先に何を求めるか」と題した記事が掲載されました。
3. 『ASAHI WEEKLY』2月27日付日曜日版の7・8頁に「特集 留学で目指せ！国際協力の専門家」の記事の中で、友松篤信教授による「こうやって、留学をキャリアにいかせ」と題した記事が掲載されました。

研究室訪問 05 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第5回目には、昨年から今年にかけて、台湾で研究生活をされた国際文化交流研究講座所属の松金公正先生にお願いしました。

「台湾という場所とともに、、、」

松金 公正

現在大学院で担当している科目は「中国文化研究」（文化専攻）と「東アジア交流論」（交流専攻）である。ただ、ここ数年来、ぼくがとくに研究テーマとして取り扱っているのは、通常「台湾」と呼ばれる「地域」の歴史である。

2003年10月から今年2月にかけて、その台湾での長期滞在調査をする機会に恵まれた。その間、多くの先生方や事務の方々、また院生、院卒業生の皆さんにご不便をおかけした

ことと思う。まずはこの場を借りて、お詫びと感謝の気持ちを示したい。

さて、今回の台湾滞在は、財団法人交流協会からの委託を受ける形であったが、具体的には、同協会台北事務所の専門調査員、及び中央研究院近代史研究所の客員研究員として研究の遂行にあたった。

まず、所属機関について若干の説明を加えることとしたい。財団法人交流協会とは、1972年日本と中華民国が断交した際に、日本と台湾との間の経済や文化など実務レベルでの交流を進めるために外務省と通産省（当時）の外郭団体として設置された公益法人である。東京に本部1箇所、台北と高雄にそれぞれ事務所を1箇所ずつ備え、台湾の人々への日本渡航ビザの手続き、台湾滞在中の邦人保護、奨学金留学生の選抜・招聘、学術研究支援、文化交流支援など事業を実施している機関であり、実質上所謂「在外公館」に相当するといえる。また、中央研究院とは数理学関係8機関、生命科学関係6機関、人文社会科学関係11機関を擁する「総統府」（「総統」は「大統領」の意）直属のシンクタンクである。つまり、台湾当局の教育部（文部科学省に相当）といわれる中央研究教育行政機関の管轄ではない研究機関であり、日本に同様のものを探すことは難しい。

そのような環境の下、今回の滞在では交流協会からの委託研究を含めさまざまなテーマに触れることが多く、たいへん勉強になったが、とくに期間を通じて重点的に継続して調査研究を進めたテーマは以下の3点であった。

ひとつめは、植民地期の台湾において、日本の仏教勢力が本国政府や植民地政府の統治方針や政策とどのようにリンクし、台湾の仏教勢力と接触し、両者はどのように変容していったのかということ进行分析するものである。一般的に戦前の宗教勢力は国家に追随し、とくに植民地においては「皇民化政策」の一翼を担ったといったような形で論じられることが多いが、その実情は判然としないのが現状である。そこで今回は、できるだけ多くの日台双方の資料を収集することを心がけた。たとえば、台湾では近年文献のデジタルアーカイブ化が国家的施策として推進されており、多くの資料館の文字資料がスキャンされデータベースとなっている。旧台湾総督府文書もその例外ではなく、国史館台湾文献館と中央研究院近代史研究所が共同して作成したデータベースが完成しており、このような資料を利用した。また、このような公的文書のほか各寺院に残されてきた私文書も意識的に収集した。そして、これらの資料を眺めていくなかで、「植民地主義」や「日帝」といった抽象的なことばでは表すことのできない、多様な形をもったそれぞれの場・時で変容する具体的でリアルな「植民地」をこれから考えていく必要性を感じ、また、それは台湾人研究者との共同研究ではじめて可能になると思い、現在そのような研究会を同種の問題意識をもった研究者たちと進めている。

ふたつめは、戦後台湾における「日本」観の形成とその変遷の考察、みつめは、現在の日台間における教育・研究交流の実態と問題点の調査で、両者には関連があるので、一緒に述べたいと思う。最近一般書などを中心に台湾が取りあげられる機会が増えたように感じられるが、そこではよく「台湾は旧植民地であったにもかかわらず親日的」との指摘

がなされる。たしかに、台湾の人たちが日本人に対し積極的に興味をもってくれるケースは多く、若い人たちの間では歌謡曲や漫画・ゲームなど日本のポップカルチャーが消費され、一方、高齢者の世代には日本語を好んで話す人たちも多い。そんな状況を知った日本人が台湾に親近感をもつことが多いのは仕方ないのかもしれない。しかし、現在の台湾における「日本」観の形成については、戦後の台湾のおかれた状況が密接に関わりあっていることは間違いなく、植民地後の台湾のことに全くといっていいほど眼を向けてこなかった日本側の視点にこそ問題があったのではないかと、そして、その植民地後を生きてきた台湾の人々がいかにして現在ある「日本」観を形成してきたのかということをも日本植民地と戦後を体験してきた世代が存命中の今こそ調査すべきということをも強く感じた。

また、台湾における日本理解やその基盤となる日本研究は、一部の文学や言語に関する研究を除いて決して豊富とはいえない。先にあげた台湾を代表するシンクタンクである中央研究院の研究者たちも大部分は欧米留学組であり、日本との関係は薄い。そして現在、これまで日台関係を支えてきた植民地時代に教育を受けた世代が交流の表舞台から姿を消しつつあり、その「あと」をどのようにつないでいくのかは急務の課題である。そして、このような状況を生み出したその責任を、日本人がこれまで「戦争責任」の名の下、真剣に台湾の植民地期や植民地後を考えてこなかったこと、さらに熱病のように「親日」に浮かれている現状に求めるのはあまりにこくなことであろうか。

今回の滞在では、研究者以外にも日頃交流する機会の少ない台湾人行政関係者や経済関係者、文化人、また現地で生活する邦人研究者や日本語教師などいろいろな出会いがあり、現地で研究することの必要性和りやすき問題点を強く認識するに至った。その具体的内容については、今後の講義の中でお話しすべきことであろう。ただひとついえることは、ぼくたち国外地域を研究対象とする日本人研究者にとって、あくまで当事者ではないとの意志を確認しつつ、でも、現地の中で、そして、現地の視点を忘れず、「台湾という場所とともにある、しかしながら最終的には外来者なのだ」という意識を変容させつつも持ち続けることの難しさを自覚することはとても大切なことだと思う。ぜひ、研究活動を離れた卒業生のみなさんにも、そんな感覚をときどきでいいから感じて欲しいと思うのだが、いかがであろうか。

(了)

知究人 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第13号は、原稿募集中のためお休みです。該当者をどなたか、自薦・他薦を問わずご紹介下さい。

フォーラム 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2005年の春を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)今回、第13号に寄稿をお願いしたのは、高際研究室OG・岩村吏佐子さんです。

◎ 4期生近況報告

「ロンドンから」

岩村 吏佐子

私は昨年4月よりロンドンに滞在し、こちらにある日本語教師養成課程にて日本語教師になるための勉強をしています。現在は講義科目を全て修了し、同じ学校内にある、日本語学習者のためのクラスで、週に3回程度ですが、教師として日本語を教えています。

私が日本語教師という仕事に興味を持つようになったきっかけもイギリスにあり、以前こちらに語学留学していた際、ネイティブの先生から直説法で英語を習い、私も自分の母語である日本語を教えたいと思ったことがきっかけでした。教育には元々興味があり、教員免許を取得したり、塾でアルバイトをしたりしていましたが、「教育」という枠の中でも、世界中が仕事の場であり、様々な国の人が生徒となる「日本語教師」という仕事は、私が大学、大学院で学んだ「国際学」が最もいかせる仕事ではないかという思いもありました。実際、日本語教師養成課程における学習内容には、日本語に関するものだけでなく、言語学や異文化論なども含まれており、国際学部、国際学研究科で学んだ事は非常に有意義なものであったと感じています。

現在私は、1~3名の小人数クラスを教えています。この学校で日本語を勉強している外国人学習者の数は、提携のロンドン大学バークベックカレッジの日本語クラスも含めると、全部で約150名です。イギリスの学校とは言っても、生徒はイギリス人だけではなく、ヨーロッパや中国、韓国など様々な地域からの生徒が集まっています。学習の目的も、日本語で仕事をしたいと言う人もいれば、趣味で勉強している人もおり、そのニーズは多種多様です。

また、提携している高校では、週1回程、日本語・文化クラスが開かれており、そちらには一度アシスタントとして参加しただけですが、私の大学院時の研究テーマにはイギリスの教育（識字、言語教育）に関するものが含まれていましたので、実際にこちらの学校でどのような教育がされているか目の当たりにする事ができたのは、非常に貴重なものでした。イギリスではここ数年、外国語を早いうちから学習する事が奨励されており、日本語もその一環として初等、中等教育の中で取り入れられてきています。「日本」という国に関してはあまり知られてないものの、日本のアニメや漢字などが若者の間で人気があり、そのような点から日本語に興味を持つ生徒も多いようです。この国の学習者数は韓国、中国などのアジアの国々と比べると、非常に少ないですが、ヨーロッパの中では、日本語学習者の一番多い国です。実際こちらで生活してみると、思わぬところで日本語を話す人に出会ったり、テレビのコマーシャルの中で日本語が使われていたり、イギリスに暮らす人にとって日本語が身近とは言えないまでも、日常生活の中で触れるチャンスのある言語であるという気がします。

日本語が母国語である日本人が、日本語を教えるのになぜ日本語について勉強しなければならないのか、という疑問を持たれる方もいますが、「話せる事=教えられる事」ではな

いということは、日本語について勉強すればするほど実感します。例えば、「かわいいね」と「かわいいよ」の「ね」と「よ」にはそれぞれ意味があり、違う役割を持っていますが、日本人はその違いを頭で考えて使い分けしているわけではなく、自然とその場の状況に応じてそれらを使い分けしています。しかし、違うものとして使い分けしているにもかかわらず、その違いを言葉でうまく説明するのは非常に難しい事だと思います。逆に言うと、頭で考えずに自然と使い分けができるからこそ、言葉で説明する事が非常に難しいのだと言えると思います。日本語の学習者の場合（特に初級の場合は）頭で考えてどちらを言うべきか判断しなければなりませんから、それらを使い分けられるようになるためには、それぞれの細かい違いを理解することが必要です。日本語教師は学習者の立場に立って、そのような、日本人が無意識に使い分けしている言葉の違いも教えられなければなりません。その他にも、「そうです」と「そうなんです」など、日本人が自然に使い分けしながら、その違いを説明するのが難しい言葉というのは、日本語の中にはたくさんあります。実際、生徒からは『毎朝』、『毎晩』はあるのに、どうして『毎昼』は駄目ですか？』といった、日本人が考えもしないような質問が出てきたりします。

まだまだ教師として未熟で、教える事は簡単ではありませんが、生徒からの一つ一つの疑問が私にはとても新鮮で、今は毎回新しい発見を楽しんでいます。

*国際学部、国際学研究科出身の方の中には、日本語教育に携わっている方、興味を持たれている方も少なくないと思います。イギリスだけでなく、日本やその他の国での日本語教育事情について、皆さんと情報交換できれば、と思っています。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第4期修了生)

◎ 同窓生へのお願い

皆さん「ネチケット」という言葉をご存知ですか。ネットワーク・エチケットの略です。送信した電子メールは、いくつものネットワークを経由しながら配信されます。しかし、配達途中で事故があって電子メールが相手に届かないこともあります。電子メールを受け取ったらすぐに、受け取ったことを知らせる電子メールを返信していただくと助かります。これが、最低限のエチケットではないでしょうか。発信者は電子メールが無事に届いたかどうか心配しています。

編集後記：限られた時間でニュース発行、同窓生の皆さんのご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い：**

住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 global@minakuru.net